拝殿

拝殿は出雲大社の主祭神である大国主神を祀り、祈りを捧げる場所です。本殿とは異なり、拝殿は一般に公開されることが多く、清めの儀式や健康・繁栄の祈願、供物の奉納などが行われます。

現在の建物は 1959 年に建てられました。その 6 年前に火災が発生し、以前の拝殿は隣接するいくつかの建物とともに焼失してしまいました。そのため、昭和天皇（在位期間 1926–1989）の弟である高松宮殿下（1905-1987）が中心となって再興が進められました。全国的に行われた募金活動では、幅広い層からの支援を示しました。設計を担当した建築史家の福山敏男氏（1905-1995）は、国の結束のモニュメントとしても役立つことを望んでいました。第二次世界大戦の後に建てられた伝統的な木造の神社建築としては最大級のものです。

拝殿は、主に大社造で、神社建築の最古の様式を取り入れて建てられています。切妻屋根と平入りの向きは切妻造りと呼ばれる様式の特徴です。建物は、日本の中部にある木曽山脈で採れた檜でつくられています。400 ㎞以上離れた愛知県岡崎市から運ばれた 13 ㌧もの礎石の上に、棟持柱が立っています。建物の東南の柱廊には、聖と俗の境界を示す大注連縄が施されています。

およそ 60 年に 1 度、社殿の大修造が行われます。本殿の修造期間中は、大国主神の仮住まいとなります。この間は、「御仮殿（おかりでん）」と呼ばれます。大国主神は、修造期間中、拝殿内の仮の聖室に祀られます。これは、2008 年、本殿の屋根の修造の際に行われました。